

歴史を語る建物たち

秋田編
(第7回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

旧加茂青砂小学校 (男鹿市)



男鹿半島南西部の漁村集落に、現在は「ふるさと学習施設」として使われている、旧加茂青砂小学校（一時中学校も併設）がある。

明治9年に開校、昭和3年に建てられた木造2階建ての現校舎は、平成13年に統合のため、125年の歴史を終えて閉校。同年、昭和26年建築の屋内体操場とともに、国の登録有形文化財に指定された。

2つの慰霊碑

校舎は山と海に囲まれた風光明媚な場所に建つ。それゆえ、自然の猛威とも隣り合わせであった。

終戦間もない昭和20年8月28日、捕虜となったアメリカ兵への救援物資を輸送中の米軍戦略爆撃機B29が、濃霧のため山の中腹に激突した。集落ではすぐさま捜索救助に向かったが、乗員12人のうち11人が死亡した。当時はまだ男鹿半島の道路が十分整備されていなかったため、加茂青砂小学校を会場とした慰霊祭には、秋田市から漁船に乗って、多くの進駐軍高官が訪れたという。慰霊祭に合わせて、小学校の校庭に犠牲者の慰霊と恒久平和を願う「和平」と書かれた慰霊碑が建て

られた。平成2年には、唯一の生存者であったノーマン元軍曹が来日して加茂青砂小学校を訪れ、集落住民による救出を感謝するとともに、児童たちとの触れ合いを楽しんだ。

一方、昭和58年5月26日に発生した日本海中部地震（マグニチュード7.7）は、男鹿半島にも大きな揺れをもたらした。小学校では午前中の授業が終わったところで、教師の指示で児童は全員避難し、校舎も損壊を免れた。しかし、同じころ、加茂青砂の海岸に遠足に来ていた旧合川南小学校（北秋田市、平成24年閉校）の児童が津波に飲み込まれた。集落を挙げて捜索救助にあたったが、13人の尊い命が失われた。

同年6月5日に合川南小学校で行われた殉難児童の告別式には加茂青砂小学校の校長も出席し、6月12日に加茂青砂で行われた現地慰霊祭には加茂青砂小学校の児童も参列した。現在、小学校付近には「合川南小学校児童地震津波殉難の碑」が建つ。

長い歴史の中で、校舎はこうした悲しい出来事とも向かい合いながら、地域を見守り続けてきた。



現校舎落成を祝う（昭和3年10月）。右側の児童玄関は、昭和26年の屋内体操場落成時に移動した。
写真提供：男鹿市教育委員会

へき地校として全国から注目

昭和初期には100人以上の児童が通学し、校舎の増築も行われていたが、戦後は急減し、昭和50年頃には児童数は20人程度まで減少した（増築部分も撤去）。折しも、昭和40年代頃から全国的に木造校舎の鉄筋コンクリート化が進んだが、加茂青砂小学校の改築は行われなかった。男鹿市教育委員会では「すでに児童の減少が続いていたので、財政面などから設備投資が見送られたのではないのでしょうか」と話すが、結果として、今日まで木造校舎が残ったのは、いわば「怪我の功名」といえよう。

しかし、加茂青砂小学校は「へき地校」として輝きを放ってきた。昭和51年には全国へき地教育研究大会の会場となり、全国から集まった教員たちは、元気に学ぶ児童たちの姿を見て「これがへき地の子どもたちか」と賛辞を贈った。

一方、平成6年にはへき地校としていち早くパソコンを導入し、電子メールや写真交換を通じて関東都市部の大規模校や九州の山あいの小規模校などと交流を図った。ホームページの作成にも力を入れ、平成12年には県のスクールホームページ作成コンテストで最優秀賞を受賞した。

閉校時（平成13年3月）の児童数は6人。1人の6年生を最後の卒業生として送り出し幕を閉じた。

学校がなくなれば楽しいことは何もない

「学校がなくなれば、あど何も楽しごとねぐるなあ」とは、『閉校記念誌』に書かれたお年寄りの言葉だ。それほどまで親しまれた校舎をどうするか。当初は解体する動きもみられたが、秋田県から「文化財にできる」とのアドバイスもあり、閉校から半年余りで国の登録有形文化財に指定された。

閉校後は、ふるさと学習施設として様々なイベントが行われている。そうした活動は、いつしか「かもあおさ笑楽校（しょうがっこう）」と呼ばれるようになった。

平成23年度は男鹿市の「西海岸ブラッシュアップ事業」で、例年に増して多くのイベントが催された。単年度事業であったが、今年度（24年度）もほぼ同じ内容のイベントが行われているので、「継続事業になったのですか？」と尋ねたところ、教育委員会の答えはノーであった。市の取り組みを地元集落が引き継いで、自主的に活動しているという。

筆者が取材に訪れた時は、地元住民が講師となって、秋田大学の学生と“ハタハタ寿司”を作っていた。住民たちの生き生きとした指導と、慣れぬ包丁さばきに奮闘する学生たちの姿が印象的だった。

ここは、今でも「学校」なのだ。

誇り高き観光スポット

取材でさらに驚いたのは、校舎の内部がほぼ閉校時のまま保存されていることだ。教室や廊下には児童が書いた絵画や習字などが掲示され、校長室の書棚は本や書類でいっぱい。行事予定が書かれた黒板には「3月24日・閉校式」とチョークで書かれている。まるで「瞬間冷凍」とでもいえようか。

なお、校舎は、イベントのないときは施錠されているが、集落の人が鍵を預かっているため、教育委員会に申し込めば、個人でも内部の見学は可能だ。

ちなみにこの建物、秋田県観光連盟のHPには掲載されているが、男鹿市観光協会のHPには掲載されていない。教育委員会では「見学に来る人もイベントで利用する人も、建物の価値を理解して下さっています。もっと大勢の方に見ていただきたいとは思いますが、もともと静かな集落にある建物ですから、大々的にPRするつもりはありません」と言い切る。それを聞いて、「誇り高き観光スポット」という形容が頭に浮かんだ。

老朽化が進んだため、平成23年には耐久性のある塗料が塗られた木材で改修工事を行った。周囲の草刈りは、市の委託を受けて地元住民が行っている。行政と地域が一体となって建物を守る。歴史ある建物にとって、これほど幸せなことはないだろう。

(フィデア総合研究所主事研究員・山口泰史)



閉校時の最後の卒業生への寄せ書き。多くの掲示物が、今もそのまま張られている。（筆者撮影）